

意見陳述書

2023（令和5）年7月21日

佐賀地方裁判所 民事部 御中

原告 渡部 寛志

1、普通の暮らし

私は、東京電力福島第一原子力発電所の北12kmに位置する南相馬市小高区に生まれ育ち、先祖代々の土地を耕してきた農業者です。野菜や米をつくり鶏を飼い、2人の娘、妻、父、母、祖母と共に生きていました。

2004年11月に産まれた長女は、生後2ヶ月で畑デビューし、春夏には野菜をかじり・草をかじり、秋冬には地面を這いずり回って、2才頃からは畑中を走り回って遊ぶようになりました。3歳になると小松菜を抜きジャガイモを掘り、草むしりも種まきも、何でも手伝うようになりました。鶏と遊び、山に入ってドングリを拾い、海で魚釣りをすることもありました。幼稚園にも行きました。地域の子もたちと遊び、地域の大人たちとも接しました。そして、じいちゃんばあちゃんとも一緒に時間を過ごしました。

2008年8月に産まれた次女も、長女とともにそんな暮らしを始めました。生き物にふれ、土にふれ、自然にふれて、親子で共に時間を過ごし、家族で協力しあい、地域の人々とともに日々を過ごす暮らしが、原発事故が起こるまでの『普通の暮らし』でした。

2、私の身に起きたこと

<混乱する日々の始まり>

2011年3月11日、巨大な地震と巨大な津波は、私の生まれ育った地域の大半を破壊しました。幸運にも我が家と家族は無事でしたが、親類・知人・多くの顔見知りの人々が目の前の冷たい泥水の中で死んでいきました。

それでもです。翌12日早朝には、「私はここで何をすべきか」を考えはじめる事が出来ました。近所の老人が津波に飲み込まれた田んぼを眺めながら泥水をなめ「大丈夫だ、田植え

には間に合うべ」と言ったことがキッカケでした。

しかし、3月12日、状況は一変しました。15時過ぎ、消防団員として消防署の外で指示を待っている時に福島第一原発が爆発しました。消防署内にいた署員が飛び出してきて「原発爆発、屋内退避」と叫んだのです。

3月12日の夜遅くには、原発から60kmほど離れた郡山市の姉夫婦宅にたどり着きました。

3月14日、第一原発3号機が水素爆発したことで危機感が大きくなり、翌3月15日に姉とその子供とともに、原発から約100km離れた会津若松市の母の実家に避難しました。5人暮らしの一軒家に沿岸部の親類縁者33人が身を寄せました。その後も、原発は爆発炎上を繰り返し悪化の一途をたどり、3月下旬には「事故長期化の見通し」という報道がなされ、仕方なく福島県外での新たな避難先を探しました。

県外避難は、不安と混乱の中にある福島に留まるより、「小学1年生になる我が子のために、余計な心配をする必要のない安全で落ち着いた地で入学式を迎えさせたい」という思いと、「この避難生活を無駄にしないよう新たな分野の農業を学びたい」という思いで決めたことです。それでもこの時には、まだ淡い期待を抱き「長期化といっても1か月程度の避難で帰れるだろう、最悪でも1か月以内には政府が具体的見通しを発表しその後の生活のメドは立てられるだろう」と予測し、1か月分の食料を車に満載しての避難でした。

<意地の再出発>

4月2日夜、軽貨物車で27時間をかけ、大学時代を過ごした愛媛県松山市にたどり着きました。そして、4月8日、長女は小学校の入学式を無事迎えることができました。しかし、「晴れの日」であるはずなのに、私の心は曇っていました。卒園式もできずにバラバラになった20人の同級生たちはどうしているのか、この小学校にいつまで通うことになるのか等々、複雑な気持ちになり純粹に喜ぶことができませんでした。

4月17日、東京電力は「6～9ヶ月をめどに原子炉を100°C未満の安定した状態に保ち冷温停止させる」という事故収束に向けた工程表を発表しました。この発表によって、今年中に戻ることが出来ない模様であることがわかり、落胆しました。

4月22日、我が家は警戒区域に指定されました。

5月17日、政府から避難区域の解除について、「東電の工程表通りに作業が進み冷温停止状態となった段階で今後の見通しを発表出来る」という、困った発表がありました。そしてこの時期、放射性物質による汚染の広がりや、その汚染の度合いが次々に明らかにされ始めました。

私は、子供への健康不安を危惧し福島への早期帰還をあきらめました。しかし、どこでいつまで・何をして生きればいいのか、誰かが指し示してくれるのでも選択肢を与えてくれるのでもありません。私は、先の見えない不安と福島から逃れてきた後ろめたさで日々葛藤しました。一時は、農民である事を諦めようとも考えました。ですが、「これまで代々続いてきた米作りの営みを断ち切られるのは悔しい、意地を貫こう」そう思って、7月上旬に愛媛県伊予市双海町で農地を借りました。そして苗を手配し、両親と会津若松の母の実家の叔父叔母も駆けつけ、7月17日にたった2aの田んぼに手植えによる田植えをしました。

<帰還か避難か>

米づくりは再開させたものの、私たち家族のこれからに関しては夢も目標も定められないままの再出発となりました。妻とは当初から意見の食い違いがあったからです。妻にとって愛媛は縁もゆかりもない土地、避難によって初めて訪れた地です。遠い愛媛で避難生活を続ける理由などありません。妻の意見は、「宮城や新潟に避難先を移したい。そうすれば両親や友人とも会いやすい」という真っ当な主張でした。しかし私は、「どこに避難しようとも、元の地に戻れないことに変わりはない。ならばより安心して子育ての出来る地で、かつ福島では栽培困難な作物を作ることによって、より意味のある繋がり方をしていきたい」と主張しました。結局、妻が折れる形で愛媛での1年、2年が経過しました。しかしこの間も意見は食い違ったまま、私の始めた農業に妻は納得することなく、2012年に長男がうまれてからは共に農作業をすることもほぼなくなりました。

妻は、2013年から隣町の食堂で働きはじめました。やりがいも感じるようになったようで、そのこと自体は良かったと思うものの、この頃から考え方の違いによる新たな溝が生まれました。妻は、「もう福島に戻る気はない、子どもにとっても環境を変えない方がいい」、それに「お

金にならない農業なんかやめて、外で働いてほしい」と言うようになりました。

ですが、私は避難当初からいずれは福島に戻りたいと考えてきました。ただ、福島に戻るためには、福島第一原発の事故が本当に終わり、また放射性物質による汚染が改善されることが必要条件です。例え避難指示が解除されたとしても、「簡単に帰るという決断は出来ない、最悪の場合、子供達が高校を卒業するまで愛媛で生活せざるを得ない」と考えていました。それでも、「いずれ福島に戻るその日まで、農民の意地を通して農業を続け、福島の人々と繋がるためのミカンを作り続ける、そしてその間にも福島での再出発の準備を進める」ということを望んでいました。

しかし、福島への帰還に関する考え方の違いは、私たち家族の人生における目的地をどこに定めるかの決定的な違いであり、冷たくぶつかりあう状態が続きました。

そして、2016年7月12日、避難指示が解除され、『戻ってよい地』となりました。

2017年4月からは、小中学校が再開しました。老人産業の先進地になると見越した両親は、農業をあきらめ、この年の秋に家を建て替え、小規模な高齢者デイサービスセンターを併設し、祖母と共に小高区に戻りました。また、2017年作からの稲の作付け制限が解除され、『米作りをしてよい地』となりました。事故を起こした原発からわずかに12km、それでも私達の地域では、営農再開の施策が優先されたのです。

原発の本格的な廃炉作業はまだこれから、除染したと言う家屋周辺や農地にもまだまだ放射性物質は潜んでいるし、山林や河川の除染はそもそも手付かずのまま、そして集めた放射性廃棄物は田んぼに仮置きされたままになっている。当時「娘は13歳と9歳、息子は5歳」、この子らを連れて戻れるのか。私は、「地元のことを放っとけない、だけど子どもの被曝も心配だ」「いつになったら帰ろうか」「どうなったら帰ろうか」と、悩みました。

負の感情に苛まれた末、2018年4月から2地域居住の生活をすることに決めました。春の田植えと秋の稲刈りの3ヶ月間は、子ども共々南相馬市小高区に暮らす。そして、他の期間を愛媛で暮らし、被曝の不安から逃れるという生活です。私は、親子で共に時間を過ごし、協力しあえる暮らしを愛媛で取り戻したいと思いました。福島では、田畑で農作業を手伝う事も、土の上で遊ぶ事も、海や川で遊ぶ事も、生き物に触れる事も、自家栽培の野

菜を食べる事も制限する事になります。だけど、本来「生きるはずだった場」で、じいちゃん・ばあちゃんと、また親戚や地域の人々と一緒に過ごす時間を作る事は、子どもがアイデンティティを形成していく上でも重要だと思いました。愛媛という「普通」の地でのびのびと生き、原発事故被災地という「普通」ではない地で制限されながら生きる。そんな生活の中で、「普通」では得られない感情や興味、知識を得、社会に対する意識の高い人間に育てて欲しいという願いもありました。

< 家族の崩壊 >

愛媛での避難生活を始めた頃、私は「日本中の原発は無くなる」と思い込んでいました。だから、伊方原発からの距離や避難のしやすさなどは、住まいを決める材料ではありませんでした。ですが、この判断は間違いでした。2016年8月12日、伊方原発は動き出してしまいました。私は、「もしもの時」に、3人の子を守りきる自信を持ってませんでした。そのため、少しでも伊方原発から遠く、少しでも避難しやすい場所へと住み替える事を考え、松山平野にある松前町での土地探しを始めました。

その結果、妻は「愛媛も福島もどっちも危ない、それならばもう福島に戻る」と言い、福島との2地域居住の生活を始めるその時、2018年4月に長男を連れ南相馬市原町区の実家に戻りました。私はその後、妻と一致するライフプランを立てる事ができず、2019年3月に離婚に至り、子どもたちを守るために選んだ愛媛での暮らしは崩壊しました。そして、私と次女は松前町の貸家と南相馬市小高区の実家を行き来し、妻と長女・長男が南相馬市原町区の復興公営住宅に、父と母と祖母が小高区の我が家に戻る、という3カ所での家族離散状態となりました。

< 原発が奪ったもの >

福島第一原発の事故発生から12年の歳月が過ぎました。幼稚園の年長組だった6才の長女は、大学1年生になりました。まだ喋る事も出来ずオムツをはいていた2才の次女は、中学3年生になりました。愛媛に避難してから生をうけた長男は、小学5年生になりました。子ども達が大きく成長して行く事は、喜ばしいことです。しかしどうしても、「こんなはずじゃなかった」「原発事故さえなければ」と思わずにはいられません。私にとってのこの12年は、

「時を巻き戻したい」と思う 12 年です。子供たちのためにもっとよりよい環境を作ってあげられず、もっと楽しんで、もっと喜びあえる事をして、家族一緒に、、、とってしまいます。

子供たちは、「福島への帰還を巡って、避難場所の選定を巡って、避難期間中の生活のあり方を巡って」ぶつかり合い意見の食い違う両親の姿を見ました。そして家族の離散を経験し、心を痛めることになりました。

私の両親は、南相馬市で地域の復興のためにと頑張り続けていますが、それまでの生活を奪われ、その心の内は「国、東京電力」に対する怒りでいっぱいです。

発災時 81 才だった祖母は、お茶飲み友達とも兄弟とも遠く離ればなれになり、また毎日の野良仕事も出来なくなり急激に弱ってしまいました。震災直前まで家族の飯をつくり、色々と世話をやき、髪を黒く染め元気だった姿はなくなり避難が始まって 3 年で白髪の引きこもり老人となってしまいました。2017 年に小高区の我が家に戻りはしたものの、認知症が進み徘徊するようになり、ある夜畑で転倒し首の骨を折り、以後歩く事ができなくなり、特別養護老人ホームに入所しています。

私たちは、原発事故前にあった多くのもの、『命以外の殆どすべてのもの』を奪われ失いました。協力し合い努力を重ねてきた毎日は一体なんだったのか、強く虚しさを感じます。

3、九州電力へのお願い

私は、原発事故直後からしばらくの間、東京電力に怒りを感じていました。しかし、事故収束のために避難もできずに、その現場に踏みとどまっているのは、親戚や知人・同級生・地域の人々などの身近な人達であると改めて気付いてから、次第に怒りは薄れていきました。私は、国と東京電力を訴え避難者集団訴訟を起こしました。ですが、心の中では東京電力そのものを憎んではいません。むしろ「頼んだぞ、頑張ってくれよ」という応援する気持ちが強くあります。私たちの地域を、安全・安心な地へと回復させるための必要条件である廃炉作業、東京電力はその重大な役目を担っているのです。

原発事故のそもそもの責任は、不確かな科学技術でしかない原子力発電を、国策として利用してきた『国』にあります。その強力な推進力によって、電力会社・町民・県民・国民の

多くが安全神話の妄信者となり、福島での事故に至ったのです。

九州電力の皆さん、原発事故へ突き進んでしまった『これまでの道』から脱却し、原発からの決別を宣言した『福島とともに歩む道』に進んでほしいと願います。九電グループの思いとして掲げられている言葉は、「ずっと先まで、明るくしたい。」です。この言葉を「虚しく響く言葉」にせぬよう、強く願います。

4、裁判所へのお願い

「私たちは過酷な経験をするよう強いられてきた。自分で望んで茨の道を歩んだわけではない。それはこれからも続くでしょう。ともに力を合わせ、進んでいきましょう。どうせ逃れられないのですから。」

愛媛で暮らす避難者仲間の、今の言葉です。

福島第一原子力発電所の事故は、絶対に起きてはならない出来事でした。『目に見えないモノ』が恐怖を生み、生きる場を奪い、家族を引き裂き、人々の営みを破壊しました。あまりに悲しく、あまりに悔しい結果を生みました。

なぜこんなことになったのか、どこに『誤り』があったのか。被害者が納得する形での究明もできていません。福島で起きた惨事は未だに終わらせる事ができていません。それなのに再び原発を稼働させることは危険であり愚かなことです。

裁判官の皆さま、福島第一原発事故のような愚かな過ちを二度と繰り返させぬように、玄海原発の稼働を停止する判断をされますよう、心よりお願い申し上げます。